

書物の影

堀本 吟

幻想のむらはみずの底

水門が貪しいむらに吐きだすのは白じろとした貨幣の記憶

記憶の堆積したむらにのこっているものは

△ある朝耳のうしろでころころと▽

とてもあざやかな胡桃が鳴るけれど

ふりかえてみるとほんとうになにもない なにもないということの湿った冷たさが

お山の麓を這っているのだ

このまったく荒廃したむらがかつてわたしの栖であった

いまは避暑地なのだ 長い行列をつかさどる冥界の虫の使者のふりをしてわたしが睡る

池にはやさしい夫人や細身のオーヴァーの人がきて影絵のように水をくんでいる

でもそれだけでおおきな慰めをあたえられ

湿った家並や緑の猛火を喰ってわたしは生きてきた

ほんとうに生が裏目にでることはいくどだってあり

旅役者がここにくると

いつも不安な尻をさげた

ここには道しるべが飛ばず季節がただひとつの文字だった

軽がるしたまぼろしのように △とき▽がうつると

記憶は盗人の指を曲げて季節の文字盤にはりついていた 生きるものの形象がないので

やさしい意地をはってわたしはいうこともあった「閉じているものを展いてごらん

なにもでてこなくても夢をたべるように夜の天窓をこじあけて

リュックにも河にも月のように清潔な貨幣がザクザクあるから

つめたい豊穣のよるこびにわたしはひたろう」

静かな日々にはむなししい娯楽とおもいやりがみちて

愛はちいさな悲鳴のかけらであった

しみじみと捨てられてしまった恋もあった 夢の裏のなかで発酵し

海はすっぱくあれつづけた

少しずつすこしずつわたしは無人の

むらの家屋にぎんいろの鏡を葺いた

かえらないこだまにむかって叫ぶこともあった

「ちいさな榮譽が欲しかったのだ美しいむらが

地図にのるような人民広場シニアプラザがそこでひとが溺れたという伝説が いくつも」

あるときみずの匂いは生きいきと惨劇を呼び戻し

「人民広場」「人民広場」とこだまして太い道が架けられた

樹立ちは順送りに村道を埋すめたくみに森のおくに逃げ

水の乾いた深谷に昂揚して集まったむらびとの肌は

青

逆立ちしてかえってきた山河には無数の水牛のひとみがまたたき

わたしは追憶の殻を破るまいとして揺れた

固い針のような感情を抱きしめてヒマラヤ杉のようにたたかたむらびとをみつめ
わたしは泣いたのだしずかに秋の火のみやぐらにさらした貌にひびがはいり
おそろしくすずしい絵の具の波がおしよせたとき
なぜわたしのいのちは虫のように死ななかつたのだろう
かつてそこに栖んでいてもいまそこにいるわけではないむらびとはわたしの不安を信ぜず
とがったイクラの粒に囲まれて溺れ
わたしのかたちとおなじ水が湧き
はげしく流れる流れる
何処をめざして

一九七〇・秋

谷中村幻想

罪——村はずれの道のきわみにさまよいでて
白い四角な広場につく
天をさすみずの炎に衝たれするどい樹木の抗議になりかわりたい
水圧にたえている森の骨格が
目を閉じると涙の奥から浮きあがる
観念はひろいばしょ ことばは砂岩
両手にみずをだき名をもたぬ 禽獣のくちばしに突きたおされる
うつむけば蜜水のふくろが頬にたれ
あおむけばきはくな 線描の河にかかったひかりの橋の夢に灼かれる

鳥がいて水没の家庭からとびたたず
霧に愛された妻は消え
ものうく灯っている原人の目の旅客機にあい観光地を尋ねられると
おおわたしは堪まらない感情ではしる
弓のようにものの魂を縦断し
細い長靴を鳴らしてゆく妻の徒渉にいやしめられる

谷中村は窓にかこまれていた
妻は眼鏡をかける
丸くふちどられた妻の眼鏡に谷中村の暗渠をぬいつける
妻の美しい眼鏡から鉱石の感情がのぞいている
妻のもつ書物から淋しい夕餉のおいがしたる

旅行にでよう風の檻のなかへ
谷中村の頭上へ夕焼の真したへ
たのしくかなしい負担のようにみひらかれた水源地のふかい下流に
観念の旅客は漂いながら
トランクにつめた記憶は鳥葬にやせた

風景は
おさえてもおさえてもふくらむものなのに
郷愁を染めこんだ影を展覧した峠茶屋でじめじめとひらく妻の目は
唯一の大地なのだ そして万象がレンズの海に漂うような心細さだったではないか

旅行をやめようわたしは

家庭のかべに「谷中村」とかく

妻の目にも「谷中村」とかく

わたしの目の中にも「谷中村」とかく

きょう書物を読んだ

伊藤野枝の「軼機」 大杉栄の「死灰のなから」 荒畑寒村の「谷中村滅亡史」
書物を閉じた

いつかみた荒畑寒村は妙に陽気なじいさんで書物のように学者にとりかこまれていた
わたしがよんだのは変哲ない都邑の滅亡について書き伝えられないものについて
指は締めつけられ母のあまきでくずれる日常の机上はあざわらい

「谷中村」と書かなければ家屋にも家庭にも神通力がない

「谷中村」についても

「谷中村の滅亡」についても
実在の彼方にみえるものなくみずは溢るる

わたしの妻は家じゅうの窓をこわし 郷愁をくちびるで砕いたのだ

「谷中村」という字をにぎりしめ

飛びたぬ鳥の尾をひきぬくように

谷中村の観念をねじきった

観光地はことばによってもえ

わたしは郷愁をねじきった

ほのほは永遠に目のなかに栖み 家庭のみずそこに鳥は睡る

すきとおった木魂は河におちこの鳥さえほんとうはいるのかまたいないのか
風のなかではすべての形象が文字のように

砂礫のように砕け谷中村の大地は青いあやめがすべる

どこから吹くのだ谷中村の風

ふくよかな危機の意匠 わたしはゆらり

と濡れた袖をゆるす

列島の最初の巫者のように

一九七二・秋

書物の影

「聡明」という観念は本当に愚かな者にも本当に賢い者にもとり憑き、一度とり憑かれると肉体からそのことばを追い出すことがなかなかむずかしいのだ。ともすればその観念は、人間存在の実情が理想よりはやおろかなレヴェルにあることを見過ごし、結果的に、処世にあつて必要な平衡感覚をどこからかポロポロと崩してしまふのだが私にも未だ見果てぬ夢というのがあつて、それは、毎日毎日一日じゅう本を読んでいたいということなのである。読めばいいではないかと一方では思う。できない訳じゃない。配偶者にわけを話して一年とは云わず一ヶ月でも一週間でもいいから家事も他人との交渉もまったく絶つて「面会謝絶」の紙を「森の研究室」にはりだした高群逸枝のように一部屋に閉じこもる。面白い小説と良い詩集とすぐれた人生論と残酷な犯罪記録と爽かな風景面集を周囲に積みあげる。そして読む。書物という「物」の重さを掌上にのせて。

林あり、

沼あり、

蒼天あり、

ひとの手にはおもみを感じ

しづかに純金の龜ねむる

この光る

寂しき自然のいたみにたへ

ひとの心霊にまさぐりしずむ

龜は蒼天のふかみにしずむ

〔萩原朔太郎全集第一 卷所収「新潮社版」
詩集「月に吠える」より、亀〕

ちょうどこういう感じだ。私の掌には、読んでいるこの詩のような純金の亀が幻想を内蔵して睡っている。

書物を展くと、紙面が水のようにゆらいで、活字がさあっと身をひいてゆくのだ。すべての書物がそうだというわけではないが、水底に沈むものは杳としてその正体をあきらかにしない。文字は書物

の底深く在る。それとも視線を逆流して読む者の内省の沼沢地に泳ぎこんだのだろうか。瞳を凝らすという云い方そのままに力をこめて紙背のはるかかなた、凍えるようなくもりをみとどける。方眼の街路に並ぶくろいしなやかなもののかげ。鉛を投げこむように押しやり、視線の先端を活字に擦りつけてゆく。疼痛と熱さにギリギリとこすられて文字の感情がたちあがる。それは私の感情ともおもしろし作家のそれとも思えるが、しかし肉体に湧きあがる感情ではなくって、字型の細い線の内部に膨む文字に属する感情——それを私は嗅ぎとろうとする。文字にのせられてくるなにかとの対決。たたかうという思いがこのときほど奇妙な真実性をもって私をとりつむことはない。いつさいの現実的な抵抗への関心が私の肉体と文字をつなぐ視線という長さに収斂されてくる。書を読む行為の反現実性が秘やかに肯定される。

現実でない場所にゆこうとすると瞳が疲れるようだ。窓をあけて寒気に、唇と臉をさらして熱を冷やし、ポットから熱い湯を注いで紅茶をいれよう。そのときスプーンですくいとする小さなプリンを美味しくつくる練習をしなくては。なにしろ、私のプリンは大騒ぎしてつくるわりには月面のクレーターよりまだ酷い無数の穴ぼこがどこでえぐってもあらわれてくるのだから。

辻潤とは親しみやすい人名であるが、彼が教師であったころ同僚に「書齋が欲しい。」という話をして笑われた。照れくさかったのかそういう自然ないじらしい欲望について書いていた。辻潤のはじめの女房である伊藤野枝にとっては、書物にゆっくりむかうことができないう文化的环境の貧しさ(夫たる辻潤が仕事を探さず、

外在の雑音にすぎないような、極めて必然の人生を歩んでいったようなのだ。

知識への触れ方は人間関係の維持の仕方にも関わってきて、辻潤と野枝のようなキャラクターの違いはもうどうしようもない。それでもこの二種のインテリジェンスをもつ男女が離れなくてはならぬ。一方が他方を抑えて高踏的な知的権力になったり、逆に社会的知性を至上のものとして押しついたり、そういう事態を防ぐならかの交流論、或いは諦念が自戒として各々の内面に構想されるほかはないであろう。

私たち夫婦の場合にも、私は時々複雑な自己矛盾におそわれる。多くの場合私は伊藤野枝であり、常々の私の脱出願望のかたちは辻潤である。野枝の文章を読むと、彼女が本当はことばによるコミュニケーションの可能性を信じすぎた女であることがよくわかる。これほど裏目読みの不要な文章はほかにない、と思うほどである。ものを読み初め、又書き初める少女の文章とその生活への密着性に魅了されたのは大正期日本の都会のナロードニキであったのだが、その後書物のことばに毒されることを自己否定していった彼女、その反インテレクトュアリズムの本当の動機はなんであろう。その意味で、書物への対し方はいさかラディカルでないと彼女のおちいった環境はよくわかるのだ。しかし、この文章になれてしまうと、思想がことばになってそれが文字に収斂してゆく様々な曲折をすかし見ることできはしれないと思う。深読みはこの場合逆効果だ。文字づらに即して如何に正常な平凡な生活上の不満を読みとるかということに限ればよいわけで、読み手の日常感覚で理解するほかはない。辻潤の文章は技術的に洗練されてはいないという意味で

家庭においては非合法の読書空間にたてこもってしまったので、経済上の負担が野枝にかかってきたと野枝はいつている。夫の肉親との交流及び育児はいつも家庭を持つ女の知識欲に有形無形のかげをなげるものである。が、彼女の社会思想を形成するひとつの大きなきっかけである。「聡明」であろうとする観念は男女の愛のゆくえも決定し、共同性の紐帯も残酷な徹底さでたち切ってしまう。野枝には「自己の利害に徹するとき自分は聡明であった」ということばがある。野枝にとってそれは「聡明」であろうとするときではなかったか。とすると、「聡明であろうとするときのみ」人は聡明であるかも知れない。ところで其の後、彼と彼女では書物というものの内面へのとり入れ方が全く違っていったかも知れないと思ったことがある。大ざっぱにいえば辻潤にとって書物は孤独なインテリジェンスを慰めるつもりだったし、野枝にとっては書物即ち他人のことばは稚い社会志向の唯一の武器であり、無理解な肉親をとくに衝つてくれる同志のような存在だった。彼には書物のすがたは純粹に観念の所産としてうつり、彼女には書物を手近におくための生活条件と時間の余裕を戦って得ることへの関心が前面にでていた。書物に触れる彼女の不器用さは、即ち自らの無知に触れ、覚醒してゆくこととの悲喜劇の象徴である。辻潤とて心の内部に自己の書齋を建築する為には、職業の放棄、家族に対する経済的責任の自己放棄、というそれなりの犠牲があったのだ。ただこの人物はその精神のもちよが本質的にインテリゲンチヤ的というのであろうか、その生涯全般にわたる思索の過程を熟知している訳ではないが私の読んだ辻潤は、現世に背いてことばの海におぼれたとしても文字の泳ぐ領域を見誤まることなく彼自身は思索人として、他人のいかなる批判も

いわゆる作品の完全性からそれるかも知れないが、その雰囲気、書くこと、読むこと、幻想することの純粹な息づかいを伝えるのである。そしてそれらは辻潤しか書き得ないたぐいのものだ。「ふあんだじあ」、そのほか「月が泡をふいている」ではじまるダダイスティクな詩とくに私は好きだ。それらは文字であることを主張するとともに、イメージにふくらむ文字であり背後に作家の存在の茫漠とした気配につながっているのだ。

こういう「思い」の嫉しきはそれなりの環境があるように思う。「環境」という場所を内面の問題と為し、意志という一点に置いたとしても、私の外側には「書物」と「ペン」と「ノート」と他に何も仕事のない時間が必要なのだ。ユイスマンの「さかしま」の世紀末人の綺羅ごのみに致らぬならば、私が「書物」を得るために莫大な費用はかかるぬとも、生活上のリズムとは一寸ちがった何かの環境が必要であるのだ。しかるに一日中何故本が読みつづけられないのだろう。私は暫く考えたことがあるのだ。

ところで「さかしま」は奇妙な書物憧憬に充ちている。この主人公の書誌探索の徹底した享楽主義にはおどろいた。その時私には少し暇があったから、作者のユイスマンが小説の主人公に集めさせた珍本奇本の書名を私のノートに書きうつしたのだ。しかし、それは「さかしま」のグロテスクな書齋に置かれるにふさわしいものであるらしく、私の白いノートに書きうつされた書名は奇妙な名辞を示すただの文字なのであった。けれど、念のため再びこの紙面に、味気ない文字としての「書名」を書き連ねてみると、それらは「緑草譜」「古代性愛学概論」「童貞考」等で「緑草譜」は西歐中世の

本草誌を詩でかいたものらしく「ウマのスズクサを牛肉とまぜて妊婦の下腹の上においておく」と必ず彼女には男の子が生まれる。「芍薬のすりつぶした根は癩癩を永久に治してしまう。」等々が記されて、日本にも「癩癩をおこした者の額に草履をのせる。」というような土俗の迷信があるが西洋のそれはなんだか魔女の秘儀的な医師のように反現実の華麗さがある。「古代性愛学概論」の著者はフィヒテの弟子二十三歳で大学教授になった人であり、一七九八年に「宗教概念の発達」を著しその後図書館司書であったころ、古代ローマのエロチックな題材を扱った「ヘルムフロダイテ」、更に資料探索の結果、本書をあらわした。これは性交態位に関する叙述が大部分を占め——というようにことが巻末についている。ただし、マンネリズム（「マニエリスムス」）の示すものは、どんな精神状態にあって人間は人間でしかありえないということかしら、と次を讀むと、「童貞考」とは倫理神学の一分野である。純潔に反する罪の問題を論じたもので、信者の懺悔の告白を聞き、適切なる忠告をしなければならぬため、未来の司祭はこうした道德問題について学習の義務をもつものとされ、かような書物がこのアモラルな書齋におかれることで、幾重にも裏がえされたパロディとしてあらわれるとは思議だ。

でも私はふと極めてノオマルな感想をもった。男の知的願望とは、色好みやハイセンスに塗りあげる陰微な内閉性の固持ということなのだろうか。男のもつこういうエロチシズムには少々つきあいきれない。

珍本、奇本をあつめてくる世紀末びとの博物誌の好奇心は、オレンジの壁紙コバルト色の天井というにぎにぎしい室内装飾へのデザ

関心であり、むしろ秘密結社の思想に無抵抗だ。

私の日記兼読書ノオトによれば、「さかしま」と同じ時期に併読したのが「無知の涙」であった。ピストル魔といわれた永山則夫の書物志向は殺人と逮捕をきっかけに開始されている。彼には独房と暗い灯りがあるだけだが、そこではじめて文字に触れつつ思考することを覚え、彼の「無知」の肉体の容器には殺人剣のような鋭利さで文字が突き刺さりつつあるはずだ。そのうち彼の肉体の内側は文字でピッシリ埋まるかもしれない。牢獄という書齋は、犯罪という概念によって設立され、云わば法的抽象性を根拠にもつ虚妄の場所なのだ。そこに放りこまれ動きを拘束された肉体は、己が肉体の重量にやましさを感じてしまうのだろうか。囚人というのは各々のキャラクターに従いつつも、あまねく強いられた不思議な力で内省的にされ、やがて本当に内省的になるものようである。

私にとってかの女性史の巨峰高群逸枝とともに、未決の殺人犯永山則夫の読書行為の驚異的な持続性はきわめて教訓的だ。永山則夫は何んにもやることのできない日常生活に「書物」という他者を強いてとりこみ、辛うじて、生、というリズムミクな時間を自律している。高群逸枝にとって書物と思索は何をおいてもやらねばならないという内面の目的意識に支えられ、職業的知識人のもつ使命感とばかりはなされた、自発的な理想志向のもとに無名者の生活思想の中心におかれ、死に致るまで一日平均十時間の勉学生活が彼女の日常だったのである。

一週間でいいから、書物のみと対峙したいと私は述べたが、「自由」なる生活者にもかかわらず私の生活ではそれは不可能なのだ。

イン志向を生むようだ。本当は精神のくらい部分で演じられるはずのトラジ・コメディの現実化へむかって殆んど倒錯した情熱を傾注する。その部屋には甲羅に寶石をちりばめた亀が這っていた。寶石が重すぎて亀が死んだ。主人公は閉ざされた書齋で気儘に遊び、壁面から部屋の内部空間に自虐的な意匠を積み上げてゆく。ブリュエル（か誰かの）「サロメ」は肉屋の主婦さんだが、ギユスターヴ・モローの「サロメ」は東洋の宗教的神秘と永遠の女性的淫蕩を創生したと吹くとき彼自身がギユスターヴ・モローの「サロメ」から、博物館の陳列品のように観られ独裁されたいのかも知れない。読む者がときに、文字の奥からみつめられ読み抜かれているような気になるのと同じように。

個人思想を支える「私」に関する理想主義は外界の平明なひかりの侵入を許さない洞窟でひそかに生き、又死ぬことを願っているのだと私は改めて識り、精神にやどる多彩な孤独をアンバランスのまま室内インテリアに意匠化させて、結局その人好みの書齋の建築によって個人主義者の属性である書物憧憬が一応の定型を得るのだと思う。社会運動その他の場面で、世の中のお役に立つものしか読まされたくない心理が首をあげるのは苦々しい限りだが、しかし一方個人主義とは、本来非合法の淋しい思想で、それでいて互いの非社交性を認めあう少数の友とさわやかな書物がなければ生きてゆけない……そんな背理的な緊張感のうちに生命を得るのだということを感じを乞うように社会に知らせても意味が無いと思うのだ。映画「華氏四五一度」の暗示したものは、人類の幸福の基礎を良質の社会関係におこうとする傾向の中で、書物憧憬は悲劇性をもつ永遠のテーマではないか、ということだ。読書人は共同体の開放的な性格に無

生活には社交とか雑事の完遂が重用な意味をもつものだから、それに仮りに私の配偶者が逸枝の旦那様のように女房役をひきうけてくれたとしても、私は三日も経ては書物を一応はなれたくなるだろう。一日暇がとれたとしても、読む事に附随する初々しい職能が持続するのは三時間である。三時間別のことをして又三時間、この程度しかできない筈だ。時には頁を展いたとたん、私の腔中に粘りを感じてすぐ頁を閉じたりする。そんなときは生理が文字を拒否しているのだ。三時間文字を眺めていると、眼に疲労がおそってきて、遠近感覚がおかしくなってくる。書物への執着にひきくらべ、生活のリズムも、精神のリズムもピタリと順応してくれない。肉体のリズムも狂ってくる。中断すると、書物の内容を受容性に持続させていたその接続点がはなれてくる。短い詩以外の文章を一章ときには一節、意味をとり、ノートし、私の主観を加えた注釈を完成してまとめるには、読書の単位時間としては五〜六時間要る。

ものの整理などに無関心な私が、近頃妙に図書館の書架をじっくり眺め、その知的労働の遺物をあざやかに分類している機能主義に驚いたりする。又「知的生産の技術」（梅棹忠夫、岩波新書）「読書の整理学」（紀田順一郎、竹内書店）、あるいは「人生の本 読書のすすめ」（江藤淳、會野綾子編、文芸春秋社）などというものをパラパラめくってみる。それも「ノートからカードへ」などという記憶の整理法をめずらしさと実用的関心から印象づけられただけで、この「私」というやっかいな自意識を時には激しく独裁する書物の影についての情理つくした対処法を発見できたわけではなく、他人の読書論として閑話休題に興をそえただけである。

しかるべくして、私は私の内面に沼沢地のように横たわる書物の

影と対峙しなければならぬ。辻潤、伊藤野枝、永山則夫、高群逸枝が書物にむかっていたように、一つの私的な理由に導かれて書物にむかい、「書物にむかっていること」の不思議さをおもってみたい。読むことの私的な理由なんて最初にはきつとないのかもしれない。やみくもに読みはじめやがて面白がりそして何かがわかったときに私は読書ということの終局面にたっているのかも知れない。

数年もそれ以上も、読む事に浸ろうとする人の日常にはそれを日常性として定着させる内面の動機と、自からなる技術操作が、その人物の個性に属する方法論として考案されてゆくはずである。内面の動機とは、強烈なナルシズムそのものかもしれない。或いはそれと表裏一体となった普遍性を求める理論志向かも知れない。それとも書物への変身を期待する反人間主義だろうか。私は殺人犯がどのような熱情をおのがじしかきたてて、読むという或る意味では倫理的で、且つ、アモラルな精神作業にむかっているのか、意地悪で卑劣なぞき趣味を抑えることができなかった。又、高群逸枝はどういうカードを、どういうふう整理し、地味で無権力の女性が信じがたい程の大業を為したのか、書物を読むという小さな動作がさらに大きな才能を展き、書物をつくる技に転化してゆく過程を逐一知りたいと思ったこともある。

何故であろうか。読むとは無駄な時間を無駄に放散する行為なのである。印象を書きこすことは必ずしも読書の必須条件ではない。他に仕事が無いから読むので、逆に云えば読む時間に他の行為は代行できない。しかも、いろいろな別の労働をやっているとき、私は頭の中で書物を扱っていたり、頭脳におかれた原稿用紙に埋まっ

ている文字を読んだりしている。ひところおそろしく排他的だった私を惹きつけたものは、ナルキッソスの神話であったが、このような神話に回帰しようとする魂とは何？

生ま身の肉体とまじわり、単純な利害にもとずく社会関係をつくるには、書物やことばを媒介にしない方が良いと思うのだ。とりわけ作家と読者はなれあわぬ方が良いと思う。普通の人が書物を読むこと。そのとき湧きおこる心の純粋な感情。その感情をたのしむことが読書行為なのだ。

文字が人間の発したことばをつつんでいてもそれは人間ではないこと。かくれようもなく文体の背後に作家の眼はあり、視線の後方の原点は読む者の眼(まなこ)なのだ。文字は彼の熱く縮まった指から這い出て再び肉体という故郷にかえることがない。眼眸をとって私の記憶の書架にすべりこんだとしても私は異国人のように文字達を招待しているのだ。いつか彼らは何かのあいさつをのこして私からなにを土産にもらい、居直り強盗が再び涉猟に旅出つように私の指先から、ときには咽喉からでてゆくだろう。或いは私は体内で文字たちの死をむかえ、ナルキッソスの泉におちる木魂のように魂には文字の屍体がふりつもりその遺跡をかかえこんだ重さのために肉体がきしんでいるのかもしれない。

まことに文字とは気心の知れぬ異物である。いい方を変えるならば傍らに発語した当人をおかない書物を読んでしまうことは、読むことの責任を一身に負わされても仕方がなく、又、読んだことに対しては一切が無責任ともいえるのだ。それに文字と私の距離はいくらでも変更可能なのだ。現実そのものではないが、世界という現実を素材にしなければならぬため、その文字がさしめす意味内容

が世界の現実である、ということができ、錯覚という意識操作によって、文字にこめられた意味の虚実はそのところを逆転することができる。結局書物の面白さはこういうところにあるのだ。精神があとびたいときに本を読むのだ。だから書物は両刃のやいば。人生は流動的で「寧静なること甚だ稀なり」(北村透谷)「萬物の聲と詩人」であるのに、書物は時間を現象をきり取る。しかし気心は知れないが書物には、いや紙面に固定された文字のことばには軽やかな交友の可能性が充ちているような、私はそんな感傷にひと刻浸りたいために頁を展く。

眼珠の奥でチリチリと火が這っているのだが、こんな眼疾に焦れながらも、一日一度は文字を眺め、遠来の友人を引きとめるようにこの箱をなでてみなければ気がすまない。私は死ぬまでは他人に對して暖く明朗でありたいと思っっているのだが、しかし生きるとは所不在の身の置きどころのないものだとも思っている。その所在なきをこのような局所的なものへ固執する意志と感情によって埋めあわせているのかもしれないが、人生の目的がかなり漠然としている場合でも、もの好みとか嫌悪というののはつきりしてくるのが不思議である。とに角私は、例えば「感情」ということばの本質や手ざわりを「感」だとか「情」だとかという字型、あるいは「カ」「ン」「ジ」「ヨ」「ウ」というキリキリ折れたり、はねたりしている線にへばりつかせておくりつけてくるようなものの伝え方が好きなのである。書物にむかうことによって私は自身の卑劣さを救われる思いだし、全くこれは私の社交上の好みという他はない。しかしかえって生ま身の人間との間には、さかしらな思い入れが消滅して、

ごく単純な明朗な利害上の交りのみが生ずるように思うのだ。私が陥いつつゆく夢想の底に不思議な明かるさで動いているのは肉体。文字をおいだした人々の微笑が突然ふきあがってだから私は書物にむかっているときは清潔になれる。

肉体と精神の過剰が他人に権力として侵入することがなく、欠如が淋しい真実としてののみ意味をもて、イメージの容量にみあった広い場所へも狹隘な洞窟へも私を連れていってくれるから書物が好きだ。書物からふと眼をあげ、人間に視点をあわせようとひとみをためらわせる人に、素朴な人なつこきをみいだす。こんな読書人は私の理想である。私が考えるキャラクターの最良の造型である。

ところで、現状の書物展望はいささか絶望である。書物はじっくりとした書誌学の主役から、せわしなくモダンな情報論の従者へと吸収されつつある。私たちの先達の精神遍歴のあとをたどればおびただしい世界への探索の旅であり、すべての土地に地名があり、すべての植物に名がつけられている。風景は観光政策の荒縄でしばられ、つまり私たちは可視的なすべてのことを知ってしまった。今私たちに不明であることは、精神の内部地形、イメージの森の構造であり、そこで繁殖する幻想生物にはまた名辞をつけてゆく余地があるのだ。可能性は肉体の内部にしかない。肉体の内部へゆくために私たちはどうしても書物をくぐらねばならないのだ。読むことによって文字が文字であることを知らねばならないのだと思っっている。見方によっては世界はすでに巨大な書物で、その四角な地平線にかこまれた山や谷あい、人間は様々の規定性に生きざるを得ず、恋する現代おんなの唇には文字がはりつき、主婦の買物かごにはつね

に一冊の書物が沈んでいる。経験というものがすべて間接的にみえ、コミュニケーションを支える肉体の重みが信じられなくなり、正直にワイザツになろうとすればする程それは観念の戯画化だ。いくらなんでも私は自分の精神と肉体をこのような形でおとしめたくないのである、と呟くときのこの声のような響き。かすかな打撃、昔忘れさったこだまのようなものがきこえる。私は文字をそのこだまにうちあてなければ先へすすめない。先へとどこへ、虚無の場所、或いは真正の「物」の形象をしたものところへ。

とはいえ、生まれたときからブッシュマンのように文字の無い文明を享受しているわけでもなし、他人が読ませようと思うものは読んでもしまふ。他者との交わりに文字をはきむ知的な伝統はもう数千年来のものだ。さて今も文字のことばにつつまれた精神史の先端にたつて、今一步深く、文字世界にかかずらうことが、何かのきつかけになるだろうかと思ったりする。つまり私は私の偏執をつきぬけたく、文字世界を突き抜けたいのだ。どんな行為にも文字の影があり、つまり私を救わない。たとえその究めが自己矛盾を露呈しても肉が文字でふくよかにふくらみ自爆し、蒼天に血肉と化した文字がちりばめられるほどの破壊。それは私のみじめなサブリメイションの方法ではないか。肉体が地に足をつけている限りイメージの成熟を許そうとせず、だから書物は、中途半端にできあがったまま私たちの前におかれ、私の内面に壁画のようにおされる書物の影は、書物がやり残したことをやれと命ずる。

書物の影は私にとっての権力なのである。私は抗わざるをえない。しかもそれは、依然として知恵の泉であり、さわやかさと冷たさの最も完璧な美につつまれている。私には……その理由が……わ

からない……。不思議な衝動から書物と私の位置の転倒がめざされているのだけれど、背理のように湧きおこる書物憧憬に再びひき戻される。なぜであろう……私は書物をはげしく嫌っているが、私のぞみが託せる場所は書物しかない。

最後にはいつもファナティックになってしまふ私の読むことへの思い。「聡明」を遠く彼方へおいやるように、私は純金の亀を蒼天の深みにしずめる。そこでそうして輝いていなきい。私の純金の権力！影のみを地上におくり稚い私の認識を感乱させながら。いっそう高い書物はこれから生じてくるのだろうかと思惟させる。

(一九七二・三・四 この項)

投稿の規程

自分自身のなかからしぼりだしたエキスでつづられた文章、自分の声がそこに響いている作品、そういった投稿を期待する。テーマ、ジャンルは限定しない。

■しめきり日／とくに設けない。

■枚数／とくに限定しない。ただし四百字詰百枚以内がのぞましい。

■五十枚以上の場合には連載になることがある。

■稿料／なし。掲載号を五部贈呈する。

■原則として原稿は返却しない。返却を希望される場合は返信料を同封されたい。

■原稿の取捨は編集者の判定による。

■送り先／東京都新宿区北山伏町三三（大沢方） 黒の手帖社